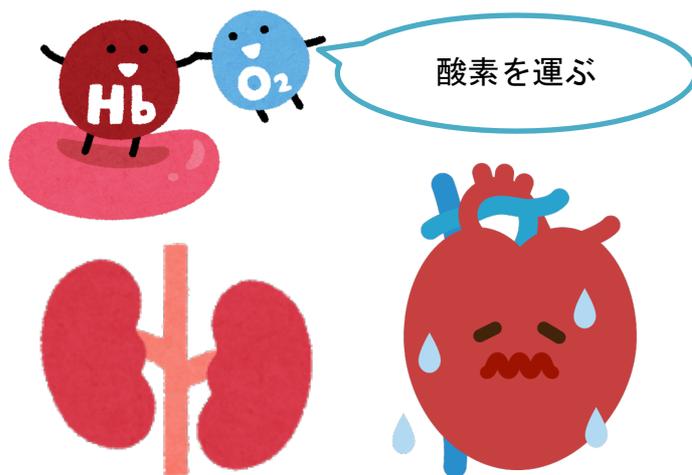


腎臓の働きのひとつにホルモンの分泌があります。「エリスロポエチン」というホルモンは、赤血球を作る働きを促進させます。腎臓の機能が低下すると腎臓からのエリスロポエチンの分泌が減り、赤血球が足りなくなってしまうます。このようにしておこる貧血を「腎性貧血」といいます。貧血により、疲れやすい、動悸、息切れ、めまいなどの症状があらわれますが、徐々に進行するためその症状に慣れてしまい、気づかないことがありますので注意が必要です。

赤血球は体のすみずみに酸素を運んでいます。赤血球が足りないと全身の酸素不足が起こりますが、酸素不足をカバーするために心臓に負担がかかります。また腎臓が酸素不足になると腎臓の機能がさらに低下し、貧血も悪化していきます。このように腎臓と貧血、心臓がおたがいに影響し合っって悪循環になってしまうため、腎性貧血は早めに治療を開始する必要があります。



腎性貧血の治療は、昨年まではエリスロポエチンの分泌不足を補う注射が主流でした。月に 1~2 回注射する必要がある治療の負担が大きかったのですが、昨年の秋に注射と同じくらいの効果を持つ内服薬が発売され、治療しやすくなりました。血液検査の「ヘモグロビン」を目安にし、11 g/dl 未満になると治療を開始します。ヘモグロビン値の治療目標値は、11~13 g/dl とされており、あまり高すぎると心筋梗塞や脳卒中の発症が増えたという報告もあります。患者さんの状態に合わせて目標値を決めていきます。



## MCV をみよう

貧血には他に、体の中の鉄が不足しておきる「鉄欠乏性貧血」や、骨髄の異常で赤血球が不足する「再生不良性貧血」、葉酸やビタミン B12 の不足によって赤血球が正常に作られず不足する「巨赤芽球性貧血」などがあります。



血液検査の項目に「MCV」というのがありますが、これは赤血球の大きさを表し、男性は 83~101、女性は 80~101 が正常範囲です。腎性貧血は MCV が正常から低め、鉄欠乏性貧血では低値、巨赤芽球性貧血では高値になります。そのほかの検査も加え、貧血の原因を見極めて治療を行います。